

I 講演企画



司 会：土田 宣明（文学部教授）

○土田 それでは、第1部を開催させていただきます。第1部の進行係を務めます立命館大学の土田と申します。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

第1部の企画の趣旨を簡単にご説明申し上げます。第1部は、予見的支援チームが担当させていただきます。予見的支援チームは、さまざまな立場に置かれた人々が社会的活動に参加するために、どのような設定や支援が最も有効であるのかを組織的・系統的に検討しています。実践的な側面や基礎的な側面から多角的に検討していくのが、このチームの特徴です。

今回は川村学園女子大学の北原靖子先生をお招きし、「高齢者支援活動場面の環境づくりーコミュニケーションの視点からー」と題して、ご講演をいただきます。北原靖子先生は、さまざまな世代を対象とした学びの環境づくりを研究されていらっしゃいます。

さらに北原先生は、今年度、学外研修の一環として、この予見的支援チーム高齢者プロジェクトの活動にもご参加くださいました。専門家の目を通した高齢者支援への環境づくりについて、お話いただける予定です。それでは北原先生どうぞ、よろしくお願い申し上げます。



講師：北原 靖子
(川村学園女子大学文学部 教授／人間科学研究所 客員研究員)

今日は、予見的支援チーム、メンバーの皆様の間の通称サポートネットで行っている音読・計算活動についてご紹介しつつ、環境づくりやコミュニケーションについて、一緒に考えていければと思います。よろしくお願ひ致します。

環境づくりの大切さと難しさ

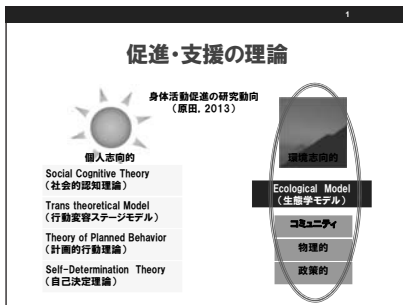
最初に、環境づくりという言葉についての私の問題意識についてお話ししておきたいと思います。私は、発達の心理学が専門でございます。私の師匠でおられる藤永保先生が、実験系の心理学は「如何にしての心理学」、臨床系は「なぜの心理学」、発達系は「どこからの心理学」だと、わかりやすくお話しなさっていました。また、発達心理学のベースは二つあって、一つは進化論、もう一つは人の福祉とか人権擁護であるとも説明しておられました。そのとき・その場で見ると、「問題かな」とか、「駄目ではないか」「未熟だな」と思える行動も、どこから来て、いずれどこへ達していくかという視点で見ると、それなりの役割や意味があったりすることがしばしばございます。その意味で、発達の心理学の領域というのは環境調整とか、足場づくりを重視する伝統があるかなと思います。「見守りましょうよ」という感じでしょうか。よく教育系の先生とお話しすると、教育系の熱い魂に感動すると同時に、ちょっとたじろぐときがありますけれども、発達系の人たちは、近くで見守りましょうよと、そういうノリが強い領域かもしれません。

そういう見守りとか、足場づくりの視点は、促進するとか支援するという領域でも、それなりの役割を持つと言われております。たとえば、ヘルスプロモーションの領域では、1970 から 80 年代ぐらいは、個人にアルコールやたばこの害について情報を提供して、こういうやり方をしたら健康になると指導して、実際に行動するよう仕向けてといった、個人志向的なアプローチがかなり熱心

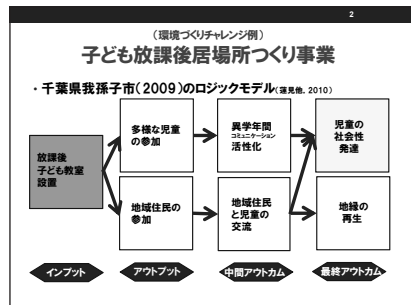
に行われましたけれども、それだけではやっぱり十分ではない。そういうところに乗ってこられる人たちはよいですけど、乗ってこられない方たちもたくさんいらっしゃるわけです。そういう意味で、もう少し包み込むような全体的な環境型のアプローチ、生態学的なモデルに基づいて施策をするとか環境づくりをしていくようなアプローチも注目されているのです（スライド1）。

私自身は、千葉県の小さな我孫子市というところに大学がございまして、その中で子どもさん、特に児童の放課後の居場所づくりに関係しております。2007年から文部科学省と厚生労働省と一緒に立ち上げた放課後子どもプラン、2014年からは放課後子ども総合プランに変わりましたが、それらのプランに基づいて子どもの放課後の居場所づくりが全国で事業展開されているわけです。我孫子市の場合、当時のロジックモデルですか、見通し図というのが、このようなモデルでした（スライド2）。放課後子ども教室というものを設置することで、時間がない・空間がない・遊ぶ仲間がない子どもたちが安全安心にのびのび活動して、いずれは豊かな社会性が育つであろうというモデルになっています。多様な児童が参加し、地域住民の方もボランティアとして入り、そうするとコミュニケーションが活性化して社会性も育つのだという。大筋の原理は間違っていないと思うのですが、箱物をつくれればコミュニケーションが活性化して、子どもがすくすく育つというほど、世の中は甘くないです。

定年後の社会貢献としてボランティアに興味をもたれる高齢の方は多いです。今日の世の中に対して危機意識があって、先ほどのロジックモデルに賛同



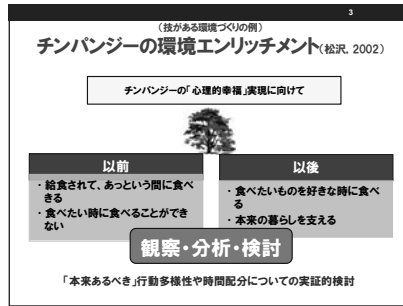
1



2

して意欲に燃えた方もいらっしゃると思います。けれども、そういう熱い姿を見ると、子どもさんの方は「何、それって？」という感じになりやすくなります。元学校の先生で、結構自信がおりの方もおられます。これがまた難しく、学校の授業のような構造と放課後の居場所は、また違うのです。ですから、学校の先生として持っていたプライドがつぶれたりなさることがあります。あるいは、子どもと一緒に何かしよう、たとえば将棋とか、囲碁とか、ゴルフとか、テニスとか、そういう切り口を持って入っていらっしゃる方は、とても楽しみにしておられます。初めはそれで子どもも楽しんでいるのですけれども、だんだん飽きると言いますか、例えば、囲碁を本当に心から楽しんでやっていける人はどれだけいるかと考えると、基本的にそんなにたくさんいらっしゃらないのです。伸びる子は本当に伸びていくのですけれども、それが一定以上に波及しないということになります。このように、箱物を、作ってはいけないうちではないですが、望んだような結果が確かに生じるには、もう少し環境づくりに「技」が必要だということになるのです。

そういう意味で申しますと、すごくうまくいっているなと私が読んで感心し、感動したのは、チンパンジーの松沢哲郎先生のご研究でした。日本でも、おサルさんが自然環境ではないところで飼育されていることが多々ありますけれども、その彼らの心理的な幸福度実現に向けて、松沢先生はいろいろご検討なさって工夫なさったそうです。その結果、以前は餌をすぐ食べきって、あとは無為に過ごしていたチンパンジーが、すごく生き生きとしてきた。それはなぜかという、「木」なのだそうです。それも、食べられることは食べられるけれども、あまりおいしくない木を一本植えると。自然の場合はサルたちは多くの時間を、餌を探して移動しながら、ぼつぼつと食べながら暮らしていくのだそうです。おいしくない木を植えたことによって、そういう暮らしの姿がヴァーチャルに実現されたのです。やはり環境づくりというのは「技」があって、この例がそうですけれども、「本来あるべきものは何なのか」を、しっかり観察し、分析し、検討した上で導入してこそ、うまくいくのではないかと思います。箱物だけでは駄目で、研究が必要になってくるのです（スライド3）。

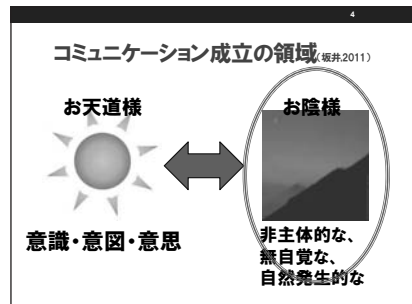


3

コミュニケーションが進む環境づくりの技

放課後子ども教室の場合も、和やかなコミュニケーションを促進するために何々を設置しますとキラキラしく詠うことも大事だけれども、気が付くと和んでいたとか、なじんでいたとか、そんないい感じのコミュニケーションをどうやって仕掛けていけるかという研究も、大変必要なのではないかと思います。コミュニケーション学会のある先生が、「おかげさまでうまくいっています」というときの、あの「おかげさま」というのは正に、そういう意味なのだ指摘なさっておられました。はっきりと目に見えるかたちではない、包み込むような環境づくりを典型的に表す言葉だろうと思います。おかげさまで「気が付いたらいい感じ」となるように技の仕掛けができれば、本当にいいなと思います（スライド4）。

そうしたコミュニケーション実現に関して、心理学の中でこれまでどのような研究がされてきたかと言いますと、ヒト同士ならではの向き合い方に焦点を当てたものとしては、まず有名なのは、クライアント中心療法、ロジャーズのカウンセリング・マインドです。カウンセラーが備えるべき三つの条件としてロジャーズ



4

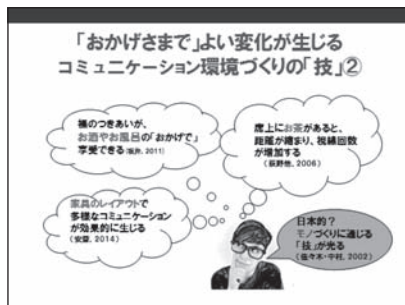
が挙げた無条件の肯定的関心、共感的理解、自己一致は、非常に有名だろうと思います。また最近、ユマニチュードというの、NHKで紹介されたりして評判だそうです。これは、認知症の方のケアに対する技術です。どういうふうに見るか、どういうふうにお話をしていくか、触れるか、それから、立つことを支援していくか。ロジャーズは話し方の技ですが、ユマニチュードは動作、動き方の技です。こういう話し方とか動き方を通して、その人がおかげさまで、ほっこりとして、リラックスして、その人らしくあるようにする。そういう技術というのが提案されているわけです。

次に、モノづくりの方向からも、さまざまな提案がされています。私は前任教が美術大学でしたが、デザイン系の方は、こういうものに熱心です。たとえば卓上にお茶があると視線を見交わす回数が増えますとか、あるいは家具のレイアウト、机も大きさを微妙に変えて角度もちょっと調整すると、コミュニケーションの内容が多様になりますとか。知覚心理学者ギブソンの『生態学的視覚論』を紹介している先生のお話ですと、日本のデザイナーは、よくアフォーダンスなどの生態学的話題を出してくるそうで、モノづくりの技に通じる仕掛けはずいぶん研究されているようです。

このように、おかげさまでコミュニケーションが和やかにとか、いいかたちで進んでいく環境づくりについては、ロジャースとかユマニチュードのようなヒトならでの技もありますし、環境デザインの方がやっていくような素晴らしいモノづくりの技もありますけれども、もう一つ、サポートネットと放課後子ども教室との比較で私が興味のあるのは、「コト（事）」です。誰とどこで何をするのかといいますが、何をやるコトですね。先ほど申しました放課後子ども教室ですと、囲碁とか将棋とか、面白そうなものを用意しても、それだけではなかなかうまくいかないところに、こちら立命館のサポートネット活動は、何と音読・計算、「読み・書き・そろばん」みたいな、あまり面白くなさそうなことをやっていらっしゃる。しかも、それを大人の、高齢の方に。にもかかわらず、すごく楽しそうに皆さんがやっていらっしゃる。すごいな、と思いました。

サポートネットの活動は、学生さんや市民サポーターの方たちの参加で回っていて、特別の専門家の「ヒト」がカウンセリングするわけではないのです。

それから、大学ならではの最先端のコンピューターとか、ロボットですとか、そういう大がかりな「モノ」もないのです。さらにやっている「コト」の内容は、なんと音読・計算。それなのに、多くの人に参加して活動を続けたいと思われて、その活動の輪が広がって続いていく。これは素晴らしいなど。「おかげさまで」コ



5

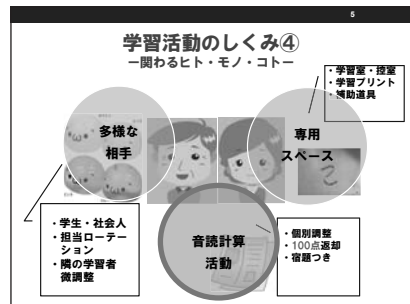
ミュニケーションが自然にはずむような、そんなヒト、モノ、そして何よりコトのヒントが、このサポートネットの中にあるのではないかと思います、客員研究員として1年間、活動の中に入れてさせていただいたわけです（スライド5）。

サポートネットの学習活動

というわけで、いよいよ、私がするのは僭越ではございますが、予見的支援活動についてご紹介したいと思います。サポートネットの活動は、いま、どんどん増えていく高齢の方たちへの認知的介入活動の一つになります。今日は世界的に、高齢者の記憶や思考の衰えを少しでも食い止める、あるいは、少しずつでも向上していくための、いわゆるコグニティブ・トレーニング研究が盛んに行われております。私はこちらの専門ではないので調べた限りですが、まだ、これをすれば確実というものはないようで、たとえば皆さまもよくご存じの「脳トレ」ゲームがありますね。ああいうゲームは非常に有望という議論もあれば、全然効果がないという議論もあったりします。脳のどこが活性化するかとか、どういうネットワークが働くかという検討と併せて、エビデンスをどんどん収集していこうとする、最先端の研究領域の一つでございます。立命館のサポートネットは、音読も計算もオリジナルのプリントを作って、「音読・計算を立命館で一緒にやりませんか」というお誘いのかたちでもう13年以上、のべ1500名以上が参加していると伺いました。すごいことです。これだけ続いて発展している活動というのは、なかなかないのではないかと思います。

学習活動は、ちょうど学校と同じように、年次と月を追って展開されていきます。市民新聞などを通して学習者を募集して、6月から学習活動を開始して、12月には交流会など楽しい活動をもって翌年2月に修了していく。修了は1年ごとにあるけれど、3年まで継続できるというかたちになっています。さらに楽しいから続けたいという方たちもいらっしゃって、修了した方たちが自発的に会を運営していらっしゃいます。また、介護施設とか福祉センターなど、地域の中でも活動を展開しておられます。一方サポーターさんですが、年度初めにやはり広報を通して募集します。学生さんも、インターンシップの一環として入っていかれます。昨年度の活動の例では、学習者55名に対し、学習サポーター75名です。サポーターさんはローテーションを組んで参加するので、延べではかなり多くなっています。地域の方もいれば、学部生の方もいれば、院生の方もいます。ここがすごく多様なのです。また、運営委員と呼ばれるサポーターさん活動を見守るスタッフの方たちがいらっしゃって、立命館の吉田先生、土田先生はもちろんですけども、それ以外に保健師、精神保健福祉士、臨床心理士、教員のキャリアのある先生とか、市議員の先生とか、そうそうたる方たちが運営を後ろで支えていらっしゃいます。

学習する方たちは、そうしたいろいろな人々に支えられながら、立命館大学の創思館2階のトレーニングルームと控え室を使って活動をさせています。いま、このスライドにある「専用スペース」の欄内に変な写真があつて、この写真は何だろうと思つていらっしゃると思います（スライド6）。これは、それらしいなと思つたのでご紹介したのですが、S字フックです。学習者の方たちは荷物を持っていらっしゃいますので、最初控え室にいて、それからトレーニングルームに移られるときに荷物を置きます。机の脇なんかには置くと、しばしば、ぱたんと倒れたりします。そうすると、出だしの段階で注意が削がれやすくなって、学習がはかどりにくくなる。そのことをちゃんと分かつていらっしゃる運営

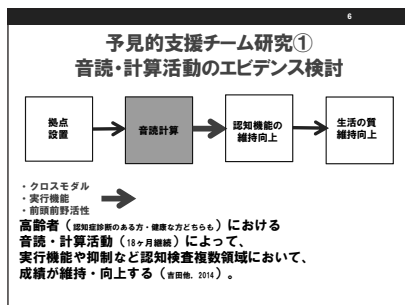


委員の先生方が、S字フックを椅子のところに引っかけて、そこに荷物を置いて、落ち着いて座れるようにと。スタートがうまくいくように、とてもきめ細かい、でも、安いでしょというエコな工夫をしていらっしゃいます。そういう技は行って見てみないとわからないことで、すごいなと思ったところでした。

音読・計算の方は、川島隆太先生の学習療法は巷でも有名だと思いますけれども、そちらにはほぼ準じているようなかたちで、100点満点で返せるような、あまり難しくない課題です。もし間違いがあったようなときも、間違っていると言うのではなくて、「このところをもう一度、ちょっとやってみましょうかね」というような、柔らかい促しをする。見直せば必ずできるレベルの問題ですので、100点できちんと返せます。また宿題もあって、大学だけでなく、週3回やる音読計算のうち1回は自宅学習して、修了後自宅でも続けていける工夫がされています。

サポートネットの調査研究

たくさんの人たちがこれだけ参加して長く活動が続いているだけでも素晴らしいのですが、私はこちらに伺って、あらためて感心したのは、大学らしくと言いますか、最先端の研究領域として、音読・計算活動について、きちんとエビデンス検討をなさっている。これは非常に素晴らしいなと思いました。これが、その検証を模式化したものです（スライド7）。まず音読・計算の現場をつくります。そこで音読・計算の活動をする。それによって、単に音読・計算ができるようになるだけではなくて、認知機能全体にどういう影響をもたらすか調べる。また、それが最終的に生活の質や機能向上に結び付くか調べる。音読・計算がどういふふうに、どこの部分に役に立つかというところを、きちんと検討なさっておられます。その結果は学会などで多数発表されているので覧になれますが、かいつまんで申し上げれば、実行機能、すなわち、段取りする能

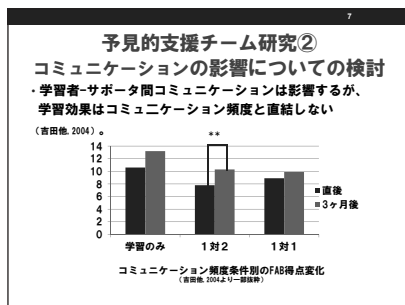


力や余分なことに煩わされない抑制力について、認知検査などで調べてみると、放っておくと低下してしまう成績が維持されたり、部分的には向上もしていくことを実証しておられます。

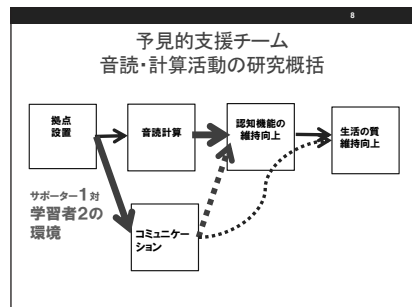
それだけではなくて、先ほど申し上げましたコミュニケーションに関しても検討をしておられます。音読・計算の活動は、後で詳しくご紹介しますが、コミュニケーションを伴っております。学習療法を批判する流れの中でよく言われるのは、音読・計算で上がったのではなくて、コミュニケーションする中で相手方が期待して、頑張れ頑張れと見守っているので、一種のピグマリオン効果で、期待に応えようと思って頑張るからできるようになるだけではないか、だからべつに音読・計算でなくてもいいのではないかというものです。こちらのプロジェクトでは、その辺りをきちんと分析なさっておられます。ちょっと専門的になっていると思いますが、条件を設定して実験的に調査しているのです。

スライドはその実験的な調査結果ですけれども、グラフの縦軸は成績です(スライド8)。横にある三つのブロックの左側が学習のみ、ですからコミュニケーションがほとんどない状態で、プリントの音読・計算だけをやってもらうという条件のグループです。真ん中は1:2で机に二人学習者がいて、片方が音読しているときは、片方は計算をしている。そういうかたちでの1:2の学習活動条件になります。右側が1:1で、それこそ目と目を見交わせるではないですか、非常に丁寧にコミュニケーションを密に取るような条件での学習グループになります。

このようにして実際にやってみると、もしコミュニケーションが全てというのなら、右側のグループ1:1が一番上がるはずですが、そうでもないのです。むしろ真ん中の1:2の方が上がる。ただ、コミュニケーション全然なしというのは、グラフ上では一見上がっているように見えますけれども、変化は統計的に有意では



ありません。学習効果が確実に認められているのは真ん中だけで、密にコミュニケーションを取ればいいわけでもないし、全然コミュニケーションがないのも駄目ですという、そういう結果になっております。以上のことをまとめますと、こんなかたちで（スライド9）、太い矢印のところをきちんと分析検討なさっていらっしゃる。こういうところが、大学ならではの貢献ではないかと思えます。



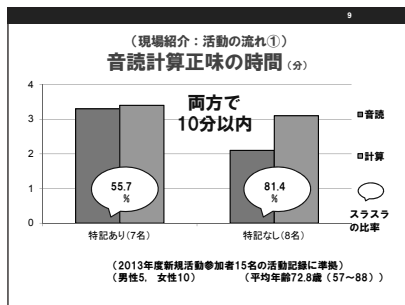
9

音読計算活動の流れの実際

一方、私の方は、先ほどの問題意識で申し上げたように「おかげさまでいいコミュニケーションになって」というところに興味がありますから、認知機能の方よりは、コミュニケーションがヒト、モノ、そして音読・計算というコトによって、どのように活性化していくか具体的に見たいと思っておりました。もちろん、音読計算活動でサポーターがやるべきことについては、いろいろ研究がされております。たとえば結果はすぐにフィードバックして褒めてさしあげることが大事とか、ラポールをきちんとつくと積極的な学習姿勢が生まれるとか指摘されているのですけれども、具体的にどんなコミュニケーションの感じかは、なかなか論文だと分からないので、それで参加させていただいて実際の活動の流れや、やりとりの実際を体験したいなど。

以降からは、実際に私は中に入って見せていただいたところのご紹介です。これは音読・計算の所要時間です（スライド10）。参加者1人ずつに活動の記録が取られていますので前の年の記録を見せて頂き、新規に参加した方々がどれぐらい音読・計算に時間を使っているか計算してみました。そうしますと、だいたい音読・計算の正味は両方合わせて10分ぐらいです。活動は1回30分ですから、その3分の1ぐらいなのです。左と右は、特記事項ありなしで分かりますが、「特記あり」というのは、たとえば脳梗塞の診断を持っていらっしゃるとか、認知症とか、幾つか気をつけなくてはいけない方の場合です。左で棒

グラフが伸びているので分かるように、「特記あり」の方では、音読でつまずいてしまうとか、時間が少し多くなります。それでも両方合わせても10分を切らないぐらいのボリュームになっているのが分かると思います。また、活動記録には「よくできた」「スラスラできた」など学習ぶりを記入する欄がございます、その割合を見ますと、「特記あり」の方でも、つまずきは半分以下で済むぐらいになっています。



10

活動の進み具合としましては、まず、着席をしてあいさつをします。ここへ来るまでの様子や宿題の確認をして、新しいプリントに日付、時間、名前など書き込んで、それから音読・計算が始まります。終わった後、結果のふりかえりをしてから、自由な対話をし、そして次回の確認をして帰って行かれる。このような30分間一連の流れの中に、音読計算学習10分が位置付いているわけです。さらに、いま申し上げたのは学習室の場所内だけの流れで、もっと大きく見ると、さらにそこを取り囲む流れがございます。ご自宅を出られて大学に来るまで徒歩、バス、場合によっては電車などを使われながら、軽い運動をしながら、こちらにいらっしゃるのです。そして学習室に入る前にまず、隣の控え室に寄って運営委員さんにあいさつし、数字盤をしたり他の学習者さんと談笑をしたりして少し待っていらっしゃる。また活動を終わってから再び控え室に戻られて、棚にある本でも見たりなさって、帰宅の途についていかれる。こういう大きな流れが午前中いっぱい使ってできあがっています。

その活動をめぐって、細やかな段取りが行われています。私もサポーターとして参加してみると、なかなか午前中ばたばたしておりまして、来室に向けて机を引っ張り出して準備して、掲示板でご案内を出したり、待機の控え室には数字板を出したりします。また音読計算にもプリントなどいろいろな道具を使います。活動が終わった後は、お見送りして片付けした後、運営委員の先生を囲んで集まって少し情報を共有します。さらにその日担当された運営委員は、

その回の活動報告書を作って、メーリングリストを用いて全運営委員間で情報を共有できるように手配します。私もメーリングリストの端っこに入れさせていただいているのですが、いままでの1年間で、昨日チェックしましたら、恐ろしいことに189通のメールがありました。ほぼこの活動をめぐって、何々さんがこういうことがございましたとか、どういうところで、こういう工夫が役に立ちましたという情報を、細かくやりとりしていらっしゃるのです。本当に頭が下がりました。こういう一連の流れというのは、もう十何年やっていらっしゃる。かなりスムーズにつくられていてすごいなと思うところです。

音読計算活動内のやりとりの実際

そういう流れに支えられて、具体的にどんなやりとりが展開されているか、ご紹介したいと思います。これは、中で実際自分がサポーターをしているときは無理なのですが、暇なときは後ろにいてメモを取っていましたので、その私が作ったメモからのご紹介です。

まず、着席場面です。私が行ったときは比較的、学習者さんが少ない曜日だったので、いま紹介するのは1:1のやりとりですけれども、「私何々と言います。よろしくお願いします」と学生サポーターさんが言いますと、「何々さん？」と尋ねてこられる、そこで漢字を教えていくと、そのおじいさまが「ええ名ですなあ」とおっしゃってくださった。そうすると「ありがとうございます」なんて学生さんが言って、とても初々しい場面が展開されたりします（スライド11）。「よろしくお願いします」と言うのは学習者ではなく、サポーターの学生さんの方が言っているのですけれども、そういう和やかな場面が結構あります。

それから宿題の確認です。これからご紹介するやりとりは、少し認知的に課題がある方なので、ベテランの運営の先生がサポーターを担当されて、丁寧に対応なさっていました。「先週お休みなされた。どうなされた

10

(資料紹介：コミュニケーションの実際①)
一着席場面一

学習者	サポーター
<ul style="list-style-type: none"> ・控え室で着席場所を聞く。 ・定めた人数の前に移動する。 ・荷物などを脇に置き、着席する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習道具を整理しておく。 ・扉を家内を覗き出しておく。 ・担当学習者の記録を確認しておく。

サ 「私、○○●●と言います。よろしくお願いします。」
 学 「●●さん？」
 サ 「はい、●は1000円の千、○は(漢字を伝える)...」
 学 「ええ名ですな」
 サ 「ありがとうございます。よろしくお願いします」

サポーター(学生)と学習者(男性特記なし)

した?」「何だったかな。忘れてしまいました。すみません」、この学習者さんはよく謝る方なのです。そうしたら先生が「いや、とんでもない」と言って、にこっと笑われた。「今日、ようこそいらっしゃいました」。そうすると学習者の方もにっこりして「どうも」とおっしゃる。先生が「宿題を見せていただきますね。いつどんなときやっていますか」と尋ねたら、学習者の方は「いや、車で出てやっております」。何かこの辺、十分理解しきれていないというか、流れに乗ってないような会話が出る場合もあります。しかし、それはそれで上手に受け流されて、「前は、どこどこでやっておられましたよね、そのときは、そう自転車でしたね」などと先生がうまく回されて、宿題を確認して、「はい、全部できております。9枚、900点です」とお返ししたら、学習者さんは、もう本当に満面の笑顔が出ていらっしゃいました。このように学習が始まる前のところから、とても細やかないいコミュニケーションが進んでいる状態です。

それから準備場面です。これは1:2の場面をご紹介します。学習者が一つの机にお二人横並びに座られる場合です。「音読・計算、どちらからなさいますか」とサポーターの方が聞くと「ええ、どっち?」、ちょっとお互いにもじもじとして「いいですか?」「ああ、どうぞ、どうぞ」「じゃ、私読む方で」など、お互いの空気を読みながら、譲り合いと言いますか、駆け引きと言いますか、そういうことがあります。またプリントの日付欄に記入しながら、「今日は、あ、何々ですよ、早いですね。もう年末ですね」「ほんとですね」など、一緒にいる場の人との、軽い世間話が行われています。

それから、いよいよ本番の、計算・音読の場面です。始めに日付と開始時間を書いて、そしてプリント。だいたい1回、表裏合6枚ぐらいになります。その後サポーターが見守りして、もし、間違いがあったときは「もう1回やっていたいただけますか」とお返します。

これ(スライド12)は、その計算場面でのやりとりです。学生のサポーターさんは素直で、答えが違っていたので「これゼロでしょうか」みたいにはっきり聞いた。すると学習者の方は「ああ、違うわ」と言って、自分で気が付かれて直される。そして、自分でふりかえってコメントしています。「間違えちゃうんですよね、ゆっくりしたらね」、というのは、ゆっくりしたらできるのに

という意味です。また「やさしいものは、早くやっちゃうんだね」などと、自分が普段ここでどういうふうに行っているかふりかえる言葉が自然と出ています。また、家では計算も人にやってもらうなどと、日常場面で自分はどうかなのということも、ふりかえていました。

音読の場面はどうかと言いますと、詩だったり、文章だったり、歌だったりしますので、その教材を基にした楽しい会話というのが、計算以上にあります。これは市民のサポーターさんと学習者の方のやりとり例ですけれども（スライド13）、100点を付けた後に、サポーターさんの方から、今回の教材は歌詞ではないかと指摘して、「そうかな」と返されたら、実際に一節歌ってみせた。すると学習者の方もつられて一緒に歌って、「違うんじゃないかな」。そうすると、サポーターさんが「いや、そうにしましょ」みたいなやりとりになりました。学生さんのとは雰囲気が違うのが分かります。これがまたいいのです。市民サポーターさんは社会人で練れていらっしゃるのです、ご自分の方から上手に冗談を仕掛けてみたりとか、ちょっと突っ込みを入れたりとか、率先して乗せていく活動をよくなさっています。

それから、自由談話場面です。とても皆さんが楽しみにしていらして、いろいろな会話が弾むところです。御紹介するのは女子学生サポーターさんと、特記なしの女性学習者さんの事例ですが、まず学生さんが「これ、かわいいですね」と、机の上に学習者さんが持っていたハンカチを指したのです。「ありがとう、干支なのよ、あなたの干支は？」と学習者さんがお返しすると、「私は何々

11

(資料紹介：コミュニケーションの実例④)
—計算場面—

学習者	サポーター
<ul style="list-style-type: none"> ・はじめに日付と時間を記入する ・計算して答えを書く(1回6枚) ・終わったら時間を記入する ・ミスがあったら確認して直す 	<ul style="list-style-type: none"> ・プリントを逆から見て確認する ・ミスあれば、「ここはもう一回確認しましょうか」と促す ・100点をつけて返す

サ 「(ミスを指して) これの間違いですか？」

学 あ、0じゃないですね。(進ず)

引き算はやりにくいですよね。

いやー、必ずまちがえちゃうんですね、ゆっくりしたらねー。

ここだと、早くやらないかん。

やさしいものは早くやっしましょ

サ 「家で計算することないですよー」

学 「ないねー、割り勘もね、店の人にやってもらっちゃうから」

サポーター(学生)と学習者(男性・特記なし)の対話

12

12

(資料紹介：コミュニケーションの実例⑤)
—音読場面—

学習者	サポーター
<ul style="list-style-type: none"> ・はじめに日付と時間を記入する ・声に出して読む(1回6枚) ・終わったら時間を記入する 	<ul style="list-style-type: none"> ・プリントを逆から見て聞く ・読み間違えあれば、簡単に指摘する ・できたら100点をつけてコメント

サ (100点つけて)「これ、荒組の月の2番じゃないですか？」

学 「そうかなー」

サ (少し歌って見せる)

学 「番ころうの、。(自分も歌ってみる) ちょっと違うな、..」

サ 「いや、きつとそうや、そうにしましょ。」

サポーター(市民)と学習者(男性・特記なし)の対話

13

です」。これはまあ、普通のやりとりですが、その後しばらく学生さんは黙っていて、少し唐突に、「あの、何歳ですか?」と聞いたのです。「私?」と、学習者さんはおっしゃって、ちょっと黙られて、それから「私はね、87歳なのです」とお返しになった。この段階では、私も脇で聞いていて、ぶしつけではないかとヒヤヒヤしたのですけれども、そうしたらその学生さんが「私のおばあちゃんは88歳なんです、この間米寿だったんです」と。そこまで聞いて、「あ、そうなんだ、これを言いたかったのだな」とわかりました。すると学習者の方も、その意図が分かったのです。「私もね、来年」と、本当ににっこりなさって「あなたも何かお祝いなさいました?」「ええ、しました」といったやりとりから、自分は来年がお祝いで、その時を楽しみにしているというお話が弾んでいきました。若い人が率直に聞いたりすることが、逆にいい感じになる典型的な発話の例だだと思います。

それでも、楽しいお話も次が控えていますから、だいたい20分過ぎからは帰りの支度とか、時間の確認が入ってまいります。ここはそれなりにやっぱり大事なコミュニケーションが行われています。これ(スライド14)は男性の例ですが、「次回はいついつですね」とか、几帳面な方で、ほかにも出す方がいらっしやいますが、手帳を出しながら確認しています。「ああ、大丈夫です」と返したついでに、「今度同窓会に行く」など、手帳を見るとやっぱりいろいろ思い浮かべるのですね。「いいですね、どちらに行かはるのですか」と返されて、同窓会のはがきを出してみたり、明日はゴルフだと、だんだん自分のいろんな予定のことが楽しく思い浮かべてきて、「外車に乗ってる奴がいるから乗せてもらおう」などと話しているうちに、「ほな、これでええですか?」と。こういう感じで、次やるべきことに向かって行った例になります。

こんなふうに音読計算自身は正味10分ぐらいかもしれないですけども、この前後をめぐって一通りの枠と言いますか、秩序がある中で、とてもいいかたちでコミュニケーション

13

(資料紹介：コミュニケーションの実際⑦)
一次回確認

学習者	サポーター
<ul style="list-style-type: none"> ・次日の日数や今後予定を確認する ・宿題有無確認し、あるときは受け取る ・荷物をまとめ、立ち、授業に移動する 	<ul style="list-style-type: none"> ・日取りや予定を伺う ・忘れ物がないよう注意して送り出す ・活動記録に記入する

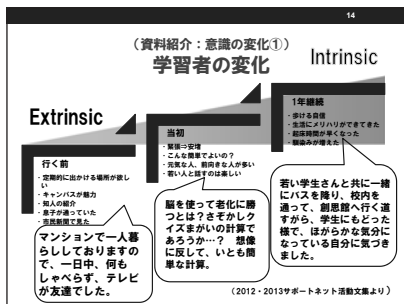
学「(次回予定を手帳で確認しながら)今度同窓会に行くんやけど」
 サ「いいですね、どちらに行かはるのですか?」
 学「(同窓会のハガキを出す) ●●、日本料理の美味しいの食べよ思っ」
 学「金銭の負担、、、美味しいですよ(笑)」
 サ「明日はゴルフだし、
 外車持っている奴がいるから、乗せてもらお思っ(考え出す)
 ほな、これでええですか?」

サポーター(学生)と学習者(男性特記なし)の対話

ンが展開されていることがお分かりいただけるかと思えます。

動機づけの変化

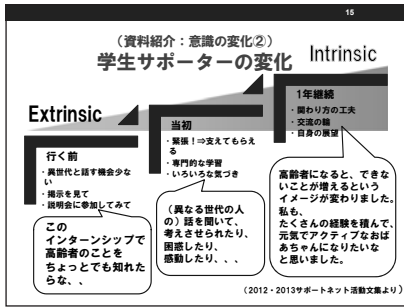
学習者の方たちも、そういう活動の中で、だんだん来るのが楽しくなっていっちゃいます。こちら（スライド15）は、毎年発行されるサポートネット報告の中で、直接その方たちが書いている作文からのご紹介例です。独り暮らしで誰ともしゃべらなくてテレビが友達だった。問題意識はやはり持たれていて、このまま



15

ではいけないと思って、こういう場に参加されるわけですが、そのときはすごく緊張していっちゃった様子です。計算とか音読とか、頑張ってしっかり勉強をやっていこうとお考えだったのです。そういう思いだったのだけれど、行って見たら、なんだ、これは簡単じゃないか。そして、コミュニケーションがすごく楽しい。それを続けていくうちに、活動がすごく楽しみになってきて、活動自身が報酬になっている自分に気が付いてきましたと書いておられました。つまり、行く前にはどちらかという悲壮な決意で、何とかせねばと、活動を手段として自分を高めようと思っていたのが、活動自体が本当に楽しいという内発的な動機が高まっていわれている感じが、よく伝わってまいります。

学生さんも、実はそうなのです。学生さんはインターンシップですから、単位をもらいながら、ついでに高齢者のこともできるといいな、ぐらいな気持ちでいっちゃる。それが実際にやってみると、いろんな体験があって、できないことが増えてくるというふうにネガティブに思いがちだった高齢者を見る目が変わって、とても勉強になる。お話して教えてもらって、楽しいことがたくさんある。ということで、やはり同じように、行くのが義務ではなくて、あるいは単位を取るためではなくて、学べる、楽しい、行くのが楽しくなっていっちゃる様子です（スライド16）。

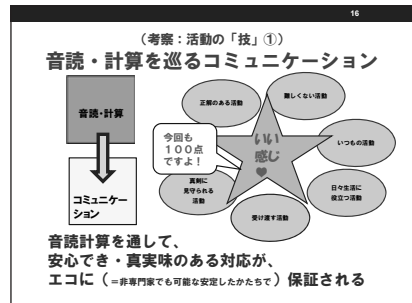


16

音読計算活動におけるコミュニケーションの「技」

というわけで、音読・計算をめぐって、とてもいいコミュニケーションが行われていることが、参加させていただいて実感できました。その技について、まとめてみます。

まず、音読計算活動だから生じるコミュニケーション特徴を示しました（スライド17）。「今回も100点ですよ！」というフィードバックに代表される、このコミュニケーションは、正解のある活動です。よくカウンセリングでは、スタイルが決まっている活動や会話は味気ないと言いますが、ちゃんと決まっている会話をきちっとやるというのも、なかなかいいものです。安心感があります。ゴールがしっかりしていますから。そのゴールはそんなに難しくないし、特殊な技能を要請されるものでもなく、日々の生活に役立つ。またユマニチュードのタッチングではないけれども、プリントを受けたり渡したりする行為が必然的に付いてきます。そして「100点ですよ！」という、安心できて真実味のある対応がされる。ロジャースが挙げた真実味のあるコミュニケーション、そ



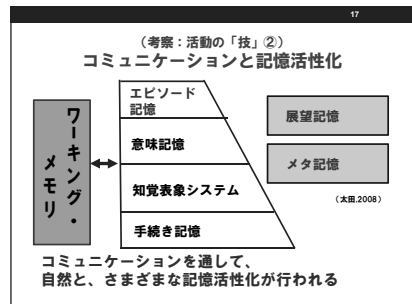
17

れが非常にエコなかたちで、枠に守られて、秩序あって展開できている。ここは大変、音読・計算活動のいいところではないかと思えます。

またコミュニケーションの持っている、もうちょっと認知的な側面にも興味深いと思いました（スライド18）。音読・計算そのものはワーキングメモリー、意味記憶、知覚表象システム、手続き記憶など、心理学で指摘する複数の記憶に関与しています。さらに、いまご紹介していましたやりとりを見ますと、自分は最近どうだったかを思い出して語るエピソード記憶も必要になりますし、「自分はこういうところが苦手だった」「こういうのを最近してなかった」というメタ記憶も使いますし、将来に向けて、「こういうことをやろうと思っていたのだ」という展望記憶のような、脳研究との関連で最近注目されている記憶領域も賦活されていくのです。コミュニケーションを通して、自然といろいろな種類の認知訓練が行われているという点でも、非常によいなと思いました。

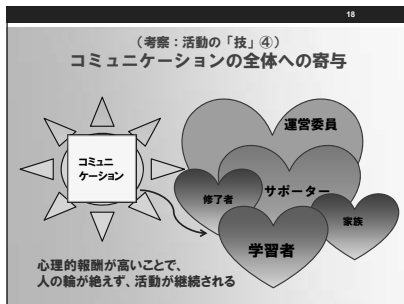
1:2の学習体制がよい理由というのは、以上をふまえた単なる考察ですけれども、自由対話だけだからなら伸びれば、それでいいというものではないのだろうと思えます。あるいは、音読・計算しますと、二人でやっているときは片方がおしゃべりになっているとき自分は計算したりしますので、すごく集中しないと駄目なのです。陰山英男先生のおっしゃるリビング学習効果のように、人の気配がある方が注意をきちんと集中できる可能性もあるのかもしれないと思えます。

また、コミュニケーションは張り合いをもたらし、学習活動全般に対して動機や意欲も高まって、それで外へ出て行くとか活動の幅を広めるとかしてゆくの、さらに生活の質が上がってゆく。動機を経由して生活の質全体を上げていくのだろうと思えます。それが学習者だけではなくて、学習者の家族の方も、この中に参加していらっしゃる。サポーターの方も、学生さんをはじめ、いろいろ活動を通して学んでいる。さらに後ろで見守る運営委員の方たちが密に連携を

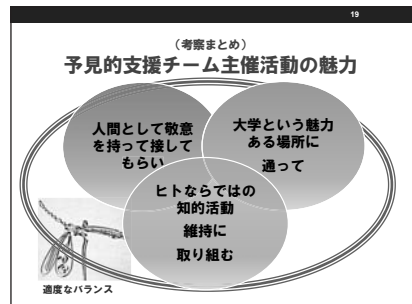


取りながら、それらを支えていく。非常に多層的に成り立つ基になっているのは、コミュニケーションがいかたちで、とてもハイレベルで維持されている「楽しい」からなのですね。参加して楽しい、なので、輪が切れず続いていく。高い報酬を払わなくても、人が集まって、活動が維持されている。その意味でもエコで、うらやましいと思います（スライド19）。

以上をまとめますと、予見的支援チームのサポートネットの活動というのは、ヒト・モノ・コトそれぞれ魅力的な活動である。学習者の方から見ると、人間として敬意をもって暖かく認めてもらえる、これがヒトの成分の工夫です。そして、立命館キャンパスという魅力ある大学に通える、これはモノ、つまり環境の素晴らしいところでしょう。そして、コトとして、人ならではの知的な活動、読み書きそろばんという人間らしい記号操作活動を、きちんと維持することに取り組んでいるという意義が持てる。おまけに、はじめさほど期待していなかったけれど、来てみたらコミュニケーションが楽しい。これらのバランスが、とてもいかたちで成り立っている。学習者の中でも成り立つし、関係者全体の中でも成り立っているところが、非常に優れていると思います（スライド20）。



19



20

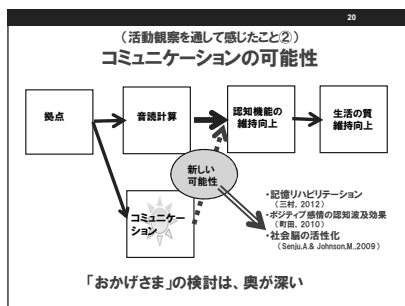
コミュニケーション研究の可能性

短い期間ですけれども、客員として、サポーターとして中に参加させていただいて、あらためて思ったことは、楽しいコミュニケーションはやっぱりパワーがあるな、最先端のコンピューターやロボットがなくなつて、楽しいコミュニケーションは、それだけで人が集まるし、続いていくのだなと、すごく当たり前ですけれども、改めてその重要性を感じました。ロジックモデル的に言えば、楽しい活動は張り合いとか情緒の安定とか、直接生活の質の維持・向上に役立ちますし、また内発的な動機を高めます。箱物だけつくって終わりではなくて、そこでのコミュニケーションが楽しいから来たくなる。来たくなると続きます。だから音読・計算も、ちゃんとやっていけるのだと思いました。

また研究的な視点から言いましても、これからコミュニケーションのパワーについて検討を深めていくと楽しいだろうと思うのです。これまでサポートネットの研究は、音読・計算を使って脳の前頭前野が活性化して、実行機能とか抑制機能とかの、要するに認知的に賢くなるところが効くと、そういう研究がメインに行われてきたわけですけれども、実際にはコミュニケーションがさまざまな脳の賢さの部分に効いているだろうという気が致します。近年は、脳研究でも、相手の感情や気持ちを読むとか、ジョークを言うとか、譲り合うとか、いわゆる社会脳の研究がかなり進んでいます。そちらの視点から言うと、音読計算活動のやり取りの中にはソーシャルスキルトレーニングに近いところもあって、社会性に関わる脳活動の維持にも非常に役立っているのではないかという気がします。認知症でも、社会的な脳活動の機能も診断対象になっていくそうです。これから、音読計算活動に付随するコミュニケーションが社会的な脳の維持向上にも寄与する可能性についても、もっと研究されてよいのではないかと思います。

あるいは、活動内のやりとりを通じて生じる展望記憶など、コミュニケーションは記憶のリハビリテーションとしても役立っているのかもしれない。それからコミュニケーションで生じたポジティブな気持ちが、いろいろ認知的な底力を上げている可能性もあると思います。脳研究は、いまネットワークモデルの研究から、ホルモンがどうなっていたとか、成長因子がどういふふうに作用するかとかの生理学的な検討も進んで、ポジティブ感情が脳の活性化全般に

寄与するという研究も進められているといます。コミュニケーションが、人の人らしい生き生きとした考え方や活動を支える上で大事な役割を持っているという、「おかげさま」に寄与するコミュニケーションの研究は、ますます可能性が広がっていくだろうと思っております（スライド 21）。



21

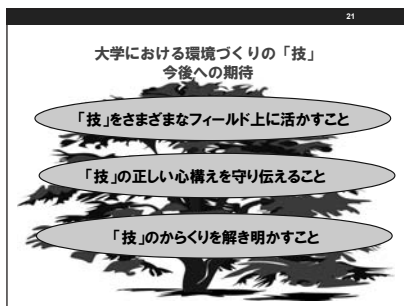
ただし、今のようにコミュニケーションが大事だと申し上げながら、矛盾するようではけれども、コミュニケーションの楽しさというのは、はじめから正面切って企画してつくるものではないなど。付いてくるからいいだろうなという感じも受けました。音読・計算という真面目そうな活動に参加したところで、あれ、楽しいコミュニケーションが付いているというのが、よいですね。初めから楽しさを当て込んで提供しようとする、千葉なら東京デイズニーランドぐらいの、豪華で娯楽的なエンターテインメントを用意しないと、いまどきの若い子なんか、なかなか乗らないです。だけど音読・計算サポートネットの活動は、やるべきことと流れがまずちゃんとあって、その中で「何歳ですか?」「87歳」「私のおばあちゃん、88歳なのです」、にっこり、のような、本当の心からの笑顔のやりとりが結果的についてくる、そこがいいと思います。

サルの研究では、人間だけが笑顔をコミュニケーションツールとして使っていて、子どもから大人になると社会的な笑顔、つくり笑いができるようになると指摘されています。つくり笑いという嫌な感じに聞こえますけれども、「こんにちは、何々と申します。よろしく申し上げます」とか、「どちらからやりますか、ああ、どうぞ、どうぞ」とか、社会的な場面でつくっていく笑いは、お互いにとって大事なコミュニケーションツールだろうと思います。高齢の方たちも、そこがきちんとキープできていくことは大事で、その上で、社会的やりとりを通して思わず、本当に子どものように純粋な、心からの笑顔がふっとこぼれてくると、かけがえのない価値や魅力に出会えたりする。よいコミュニケーション環境づくりとして、初めから100点満点キラキラの純粋ダイヤモンド

ドミたいな笑顔を引き出してくる必要はない。気が付くと、そういうのに出会える、出てくるというふうに住掛けるのがいいのではないかと、参加させていただいて思いました。

大学における今後への期待

最後になります（スライド22）。こちらの活動に参加させていただいて、高齢の方たち、学習者の方たちは本当にパワーがあって、学生さんのような若い人たちを育てていく力を自然にお持ちだなというのを、あらためて感じました。個々人の中で認知機能を上げて生活の質を向上するだけでなく、もったいないのでぜひその素晴らしいパワーを次の世代育成に使っていか、地域や周辺に広げていか、自然に展開できていければ絶対にいいだろうなど。日本は高齢社会の最先端ですから、高齢者のパワーを、いいかたちで展開していく最先端の研究の場となれるはずだと思います。サポートネットの活動では大学生が巻き込まれて育っていく姿を見せていただきましたが、私のところの現場ですと、小学生とか、子育てで困っているお母さんたちとか、地域の方にも、そういう力が回っていけるといいのにな、と思います。立命館サポートネットの活動は、いずれ地域に返していくことも念頭に置かれていらっしゃるようなので、大学の魅力に頼らない、地域に広げるかたちを模索なさっていらっしゃると思います。私なんかの地元の我孫子市はお金がないので、そもそも箱物もたくさんつくれません。ですから放課後子ども教室の中で、子どもだけに焦点を当てて体験教室とか科学勉強とか提供するのでもいいけれども、隣の空き教室が地域交流室になって、高齢の方たちが自分の音読計算に通っていらして、子どもたちが「何をしているの？」と見にくる。そうするとおじいちゃんおばあちゃんが勉強をしている。ああすごいな、それって面白いの？みたいな、そういうちょっとしたやりとりだけでも生まれるなら、とてもいいのではないかと想像していま



す。そういう新しいフィールドへの広げ方についても、ぜひ、これから知恵をいただければと思います。

また2番目に挙げた、技の正しい心構えを守り伝えるというのは、大げさですけれども、実践をするとき注意しておきたいことです。見守りとか環境設定というものは、これまで話してきた内容だと、とても和やかでいい感じに聞こえますけれども、裏を返して悪い方向に使えば、その人たちの自由意志とか意思決定がないまま、気がつくとか絡め取られていくとか、押し流されていくとか、そういうリスクを含むかもしれません。そうではなくて、その人たちの主体的な意思とか、参加の意欲がきちっと育まれることを前提とした上での「おかげさま」の在り方をちゃんと伝えていく。大学の場合ですと研究倫理がそれに当たるとは思いますけれども、そこもきちんと伝えていくことをしていないと、特に地域のいろいろな場所に流していこうとすると、「じゃ、こうすればいいんですね」と、付和雷同になりがちなところがありますので、そこは違うと。正しい心構えは、技と同時に必要なと。ぜひ正しく伝えていただければと思います。

それから最後に、技のからくり解明です。これまで申し上げたように、サポートネットの音読・計算活動1つを例に取りましても、純粹に音読・計算だけではなく、コミュニケーションも付随して、いろいろなかたちで脳機能の維持向上に関与しているようです。そのからくりを解き明かしていくというのは、大学ならでの仕事になると思います。正しいエビデンスを収集したり、メカニズムを明らかにしてきちんと伝えていくことを、予見的支援の皆様方には今後とも続けていただければと思っております。以上です、ご清聴ありがとうございます。

質疑応答

○土田 北原先生、本当にありがとうございました。北原先生には今年1年間、学外からわれわれの活動に参加いただきまして、あらためて、ああ、そうだったのだなと思わされるが多々ありました。特に活動の「意味づけ」というところで、我々ができていなかったことをご教示くださった点が幾つかあったように思います。

フロアの先生方から何か、ご質問、ご意見、ご感想、もしございましたら挙手していただければと思いますが、いかがでしょうか。

○会場1 最後におっしゃっていた、更に別のフィールドで、ということを考える場合に、これはこういった活動を、例えば非常に幅広く拡げていくとしたら、その資金はどうするのですかという問題があるかと思います。

いまこれは非常に研究ベースというのでしょうか、そしてボランティアな関係でやっているというところがあると思うんですけども、やはりお金を取らないといけなくなると、何か一種参加者はお客さんになってしまうみたいなところが出てくると。そうするとかなり環境自体が変わってしまうということが起こり得ると思います。この金銭的なことというのは現状ではあまりないわけですけども、そういった場の設定自体について少し何かコメントがあればいただければと思います。

○北原 ありがとうございます。そうなのですね。さっきコミュニケーションが楽しいと長続きしてエコであると申し上げましたけれども、ちゃんと展開して根付いて続いていくためには、そういう楽しさというものが、それぞれの心の中に採算が合うようなものになっていなければ駄目なのだと思います。

マクドナルドのサービス、スマイルゼロ円といいますけれども、実はあれはゼロではなくて笑顔は心理的には報酬です。だからボランティアなどお金がもらえないとケチくさくてやっていられないではなくて、笑顔という報酬が楽しくて、それを目当てにやりに行く。ただ変な例ですがゲームと同じで、笑顔をはじめ当てにしてはやっていない。でもたまにすばらしい笑顔に出会うと、うれしいですね。出会えるかどうかはギャンブルですから、手に入れるため通いたくなるわけです、ひどい言い方をしていますけれども。そういう仕掛けをつくりたい感じがあるのです、私的には。つくれたらいいなど。

たとえば、いま放課後子ども教室ですと、高齢の方などがいろんな工夫をして頑張っているのです。そのときの確率が、子どものキラキラはじける笑顔と成長が100%見えるに違いないつもりで待っていますと、なかなか出会えないですし、要する労力もすごく大変ですから、まあやってられないやとな

ります。そうではなくて、たとえば音読・計算で自分の勉強をしたいのだけでも、そうしたら学校の教室が空いていて、近いし、使いたい。使わせてもらう。そのときに「せっかくだから子どもが脇にいてもいいですか」「べつにいいよ」という中で、子どもの笑顔と出会ったらすごく楽しい。それが報酬になって、サポーターをやってみようかになっていく、みたいな。

そういうちゃんとなつながっていけるような環境を、お金が介在しないとやらなくても済むように安価でエコにできるのは、やっぱり工夫かなと。そういうものができるといいなと思っているので、もちろん難しいですけれども。

○会場 1 ありがとうございます。

○土田 ありがとうございます。ほかに何かございますでしょうか。

○会場 2 北原先生ありがとうございます。いま、お金の問題がありましたけれども、この音読の活動というのは、大学の地域支援や地域包括支援センターの方が入って、全国でも本当に要請が高まったりして、2000ヶ所ぐらいやっていると聞いております。

立命館大学のこの方式、プロジェクトのやり方というのは、やっぱりかなり研究費の中から費用、いろんな課題がありまして、それを使っておりますので、通って来られる学習者の方は無料で、それが受けられる。その代わりにいろんな研究の対象になっているふうなことも含めて、いろんな活動の中では、ちょっとこの立命館大学の方向というのは特色があって、いま、北原先生がまとめてくださったように素晴らしい面があるのではないかというふうに思っております。

私はずっと長い間、これに関わっていますが、やっぱりこの活動を支えるのは、もちろん場所もそうですけれども、サポーターの存在で、それが非常に大きいです。先ほど紹介してくださったように、こちらではこのサポーターの研修というのを4日間もかけまして、しっかりと高齢者に対する心理的な展開から理解していくようにしているので、そうした支える基盤がしっかりあるのではないかなと思っております。

これから進めていく中で、その辺についても大切にしていきたいなと改めて考えております。よろしくお願い致します。

○土田 ありがとうございます。次、何かございますでしょうか。

では、私の方からよろしいでしょうか。先生のお話の中でコミュニケーションづくりというところの重要性をお話いただいたのですけれども、これと「おかげ様」という概念が特に印象に残っております。

「おかげ様」という概念は、コミュニケーションづくりをするときの仕掛けのような気もするのですが、もう一度そのあたりの仕掛けというのでしょうか、何か補足事項などございましたらお教えください。

○北原 そうですね。取りあえず熟達したプロフェッショナルの心理研究でよく言われますけれども、こうしてやろうと思ってやったものは、だいたい肩に力が入っており、うまくいかないと言います。助けてやろうとか、箱物をつくってやったから、きつとうまくいくはずだみたいところで、ぴかっと欲目が出ている状態でコミュニケーションをして、まあ、うまくいくことはないという。

では、欲目があるてはいけないかという、あつていけないことはないです。それは願ひであり、希望であり、とても大切なものだけれども、熟達していくと、サポーターなら先ほどお話に出た研修などを通して少しずつ学んでいく中で、相手のお気持ちが理解されたりしていくと、欲目がだんだんナマのかたちから消えていって、ちゃんと見守っていきたい、もし笑顔に出会えたら本当にうれしいという気持ちが育ってきます。

先ほどお話に出たサポーター研修を私も受けて感じたのは、きちんと脳機能の問題とか教わるだけではなくて、例えば、学習室の椅子にひっかいたS字フックの話もそうですけれども、「こんな工夫をしたら、こんなに役に立っていただいたのです、うれしいわ」という、そういう運営委員の先生方の様子を拝見するわけです。そうすると先を行っている方の姿を見て、自然に打たれるところがございました。

この予見的支援のサポートネット活動がすごくうまくいっているのは、このように層が厚いのですね。高齢の方と支援する人だけではなく、支援する人の

中に学生さんがいて、市民の方がいて、サポーターを支える運営の方がいて、その中でいろんな経験がある人たちの姿を見ての学びがたくさんついてくる。仕掛けは一日ではできないけれども、そういうふうに関わりたい人たちがうまく配置できると、それはいずれ育まれていくのだという気がいたしました。

○土田 ありがとうございます。ほかにございますでしょうか。

○会場3 大変興味深い、非常に楽しいお話で、ありがとうございました。先生のお話は、全体的に大変興味深い内容だったのですが、先生ご自身が放課後子どもプランをされているということで、それに関わってお伺いしたいです。革新的研究開発推進プログラム（ImPACT）というところがありまして、私自身も ImPACT の中で、いいコミュニティをどうつくるかというところで苦労しているところがあるんですが、先生が今日出されたキーワードとして、おかげさまのコミュニティと言いますか、そういうところが大変面白いキーワードで、コンセプトだなと思いました。これは海外の人たちにどういう風に説明したら良いのかなと思って色々我々も考えていたのですけれども、キーワードでも結構ですが、先生のお考えで、「おかげさまで」というのを外国人に向けて、もう少し噛み砕いた言葉で説明するにはどうすればいいのかを教えてくださいなればと思います。

○北原 先ほどフォーラムの中でもちょっと申しましたけれども、日本的らしいですね、おかげさまでというのは。百寿の研究、100歳を超えた方たちの心理学の研究の中でも、よくおかげさまでという言い方をなさって、それは「無為自然」という概念とも結び付いていると。人に助けてもらっているというだけではないのです。たぶん、S字フックをはじめ、いろんなモノや、いろんな場や、取り巻く空気と言いますか、それら全てによって何となく支えられている。だから誰のおかげというふうには必ずしもはっきりしてない。それをよしとする感覚というのが、日本の心象にあるのだそうで。

確か百寿の研究者の方もそれを外国の方に、あるがままに、気がつくともうなっているみたいな説明がうまく通じなくて困るという話をしていたら

て、でもそれが日本的な「おもてなし」というものの真髄でもある。日本の誇り得るところでもあるということ、確か読んだ記憶があります。

とても私の英語力では無理で、午後の全体討論企画のところまで議論していただければいいのですけれども、精神そのものとしては非常に日本的な発想、日本人が大事にしている、もしかしたら優れた技なのかもしれません。京都の方たちは、そういうところがとてもお上手だという気がしているのですけれども、「おもてなし」も確か日本固有の言いかたで、面白いところですね。

○土田 ありがとうございます。ほぼ予定の時間になりますので、これで第1部の「高齢者支援活動場面の環境づくり」、北原先生のご講演を終わらせていただきます。誠にありがとうございました。

文献

- ・原田和弘 (2013). 身体活動の促進に関する心理学研究の動向：行動変容のメカニズム, 動機づけによる差異, 環境要因の役割. 運動疫学研究, 15, 1, 8-16.
- ・蓮見元子・北原靖子・川嶋健太郎・浅井義弘 (2010). 放課後子どもプランの実際の運営についての自治体レベルでの評価指標作成等に関する研究. 一子ども・保護者・教職員・ボランティアへのアンケート調査に基づいて. こども未来財団平成 21 年度児童関連サービス調査研究等事業報告書.
- ・本田美和子・ジネスト, I., マレスコッティ, R. ユマニチュード入門. 医学書院.
- ・川島隆太 (2010). さらば脳ブーム. 新潮新書 396.
- ・松沢哲郎 (2002). 進化の隣人：ヒトとチンパンジー. 岩波新書 819
- ・Owen, A.M., Hampshire, A., Grahn, J. A., Stenton, R., Dajani, S., Burns, A.S., Howard, R.J. & Ballard, C.G. (2010). Putting Brain Training to the Test. *Nature*, 465, 775-778.
- ・坂井二郎 (2011). 周縁化されたコミュニケーション領域—お陰様を鍵概念としたコミュニケーション研究の探求—. *Kyushu Communication Studies*, 9, 1-24.
- ・Senju, A. & Johnson, M.H. (2009). The Eye Contact Effect : Mechanisms and Development. *Trends in Cognitive Sciences*, 13, 3, 127-133.

- ・ 田島信元・長沼君主・石毛順子（2007）. 認知症高齢者の脳機能賦活および認知機能機能の改善に及ぼす学習者・学習療法スタッフ間コミュニケーション過程の影響. 白百合女子大学 NII-Electric Service, 107-124.
- ・ 吉田甫・土田宣明・大川一郎（2004）. 音読計算活動の遂行とコミュニケーションの要因が老年期痴呆患者に対する影響に関する研究：予備的分析. 立命館人間科学研究, 7, 109-118.